

村山雅美著『地の果てに挑む』

一読した感想は、「マア、なんと良き時代だったことよ・・・」の一語に尽きる。この本は昨年出版された本だから“記憶の本”という範疇には入らないが、書かれている話題が50年前まで遡っているから、このページに収録させて貰った。本邦ヒマラヤ・エクスペディション黎明期のパイオニアとして、また数次に亘る南極観測隊員（隊長）としての回顧を新聞に連載したものである。

著者は世間では“南極男”として知られているが、山の方でも令名が高い。東京生まれでありながら、山に行きたいばかりにわざわざ松本高校

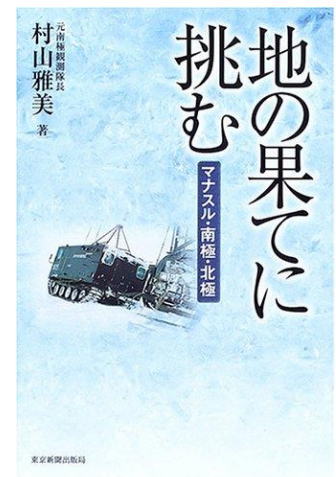
（旧制）に進学したくらいである。この本は、学生時代のこと、敗戦直前に入隊した海軍時代のことから日本最初のヒマラヤ遠征（マナスル）、第1次から第15次までの南極観測隊のこと、また引退してからの南極航空路開拓調査行や85歳でのヒマラヤ回顧トレッキングまで、60年間に亘る極地でのエピソードを綴ったものである。

前人未踏世界第8位のマナスルは50年前の1956年、日本の第3次マナスル遠征隊によって初登頂された。おりしも、世界各国がエベレストをはじめとするヒマラヤ高峰の初登頂に国威をかけて凌ぎを削っていた頃で、敗戦国日本も戦後復興のシンボルだとして国中がその成功の報に沸きかえったという。この遠征を支援した毎日新聞はトップ1面を全てこの記事で埋め尽くした。著者は第3次には参加しなかったが、それに5年先立つ先遣隊や第1次、2次の隊員として裏方でこの成功を支えた人物である。マナスルは現地では神の山と崇められ、折から現地を襲った旱魃や疫病はこの聖山に踏み込んだ日本隊に対する神の祟りであるとして住民の反感を買い、鉈や鋏や石つぶてが飛んでくる騒ぎになった（サマ事件）。著者は住民との和解交渉役として大変苦労したエピソードが紹介されている。海外旅行が日常茶飯事となり、多くの登山者やトレッカーが現地住民の生活圏に（土足で）入り込む時代になった今、「他家のお座敷に上げて頂く」ということは一体どういうことなのかを改めて考えさせられる。

（余談であるが、1991年、雲南省・梅里雪山（6740m、現在も神の棲む山として入山禁止、未踏峰）で日中合同登山隊17名が全員雪崩で遭難死した事件があった。内、日本側は京大学士山岳会員11名であったが、チベットの地元住民は、これを神への冒瀆が齎した当然の報いとして遠征行為を非難し、特に日本側隊員の搜索活動に対しては情け容赦もなかったと伝えられているが、単に人道上的問題だけではなく、我々日本人には想像も及ばない宗教上の深淵を覗くような気がする。これも他人のお座敷へ上がる場合に考えなければならない大切なことであろう。なお、この事件の経緯やその後のことについては最近刊行された「梅里雪山―17人の友を探して」＜小林尚礼著、2006年2月、山と溪谷社刊＞に詳しい）。

さて、著者は南極観測隊には最初から参加し、その礎を築いた。現在の恵まれた南極生活と異なり、設備も装備も貧弱であったらしいが、隊員の意気だけは軒昂で、山で結ばれた隊員同士の和も強かったそう。随所に隊員同士が交わしたユーモア溢れる交友録や絆のエピソードが出てくる（ちなみに、現今の隊員は個室に閉じこもって居る事が多いそう。これも時代の変遷であろう）。第1次越冬隊長を務めた西堀栄三郎の「南極越冬記」を彷彿とさせる。

物資も予算も乏しかった当時、ヒマラヤ遠征にも南極観測にも精神的・物理的な気苦労が多かったと思うが、著者はそれをユーモアで笑い飛ばし、隊員間の接着剤となった。根が楽天主なのであろう。冒頭に「良き時代・・・」と書いたが、当時の登山は精神的にも経済的にも余裕のあるセレブでハイソな連中のある意味では道楽であったとは思いますが、それだけにカネとモノが溢れかえった現今の市場経済原



理に支配されているセチ辛い今の山の世界とは異なり、自由闊達な雰囲気だったのであろう。そうはいえ、「良き時代」を切り開いたのは彼らのリベラルで洒脱な精神であったと思われる。

また、国の予算取りや民間からの寄付集め、頓挫した南極観測事業の再開のために中曽根康弘などの国会議員を南極まで連れ出すなど、著者の行政的手腕も相当なものである。

昨年、日本山岳会の講演会シリーズ「語り継ぐ黎明期の登山」で著者の講演を聞く機会があったが、豊饒として軽妙洒脱なユーモアと冗談で聴衆を沸かせておられた様子はとても87歳という年齢には見えなかった。また、数十年も前のことを昨日のように細部まで覚えておられる博覧強記にも驚かされた。

南極観測への遠征は当時の日本の若者を沸かせたイベントであった。私事で恐縮であるが、さる駅弁大学理学部物理学科の学生であった小生は、気象庁に入って南極観測隊に参加してみたいものだと、身の程も弁えず国家公務員上級職甲種試験（名称は当時）を受験したことがあった。富士山頂測候所などに勤めれば毎日山で遊べるであろうし、上手くいけば南極に行けるかもしれぬというあらぬ幻想を抱いたのである。気象庁にキャリアの技官・研究官として就職するにはこの試験をパスしなければならない。一般教養試験と語学試験の部は雑学を得意とする小生には何とすることもなかったが、専門の物理学の試験の部ではオット驚く為五郎で、初っ端第1問からして問題の意味さえ分からなかった。早々に逃げ帰るしかなかった。山と赤提灯に現を抜かしていた怠け学生に左様な試験を突破する学力がある筈は無かったのである。

東京新聞出版局2005年刊。

(2006年5月 記)

《追記》

著者の村山雅美氏は、2006年夏に他界された。「垂直と水平の道」の渡邊兵力氏、「アルプ」の串田孫一氏も鬼籍に入られて、かつて愛読した本の著者達が一人、また一人と去ってゆくのは淋しい限りである。合掌。

[「山書の小溪」目次に戻る](#)